

張州雑志の世界

文学部 山田 邦明



地域の歴史や文化を調べるときに、充実した地誌ほどありがたいものはない。筆者はこれまで関東地方、とくに相模や武蔵といった地域の中世のを中心に研究を続けてきたが、その中でいちばん参考にしたのは、江戸幕府によって編纂された『新編相模国風土記稿』と『新編武蔵風土記稿』だった。間宮土信らの幕臣たちによって編纂されたこの希代の地誌は、当時の村ごとにその来歴を述べ、小名（村内にある小地名）や山・川、寺や神社とその由緒・宝物などを網羅的に記し、棟札や古絵図なども概略を図示してふんだんにはめ込んでいる。そしてこうした綿密な記事は、特定の地域にかたよることなく、相武両国一帯にまんべんなく及んでいる。

幕府の膝下であるという特殊事情から、このような地誌が作られたのであろう。列島全体を考えれば、こんなものが存在する地域は限られているといえようが、尾張徳川家が遺した尾張の地誌は、質量ともに注目に値する。尾張藩の地誌編纂事業はかなり早くから始められ、1752年には『張州府志』という地誌が完成しているが、漢文体のこの本にあきたらない思いを抱いた内藤東甫という藩士が、領内の各地を巡って、地域にのこされた情報や史料を書き並べてゆき、これが彼の死後（東甫は1788年に61歳で没）にまとめられて藩主に献上された。『張州雑志』全100巻である。多くの幕臣たちの共同作業で成った『新編相模国風土記稿』・『新編武蔵風土記稿』とは違って、個人の努力の産物であるから、全体的な統一はとれていないが、目にし耳にしたあらゆる情報を貪欲に書き連ね

ており、強い個性を持つ地誌になっている。藩主に献上されたこの書物は、藩の秘庫をひきついで蓬左文庫に所蔵されており、1975年に愛知県郷土資料刊行会によって影印本が刊行されている。ここでは影印本を手がかりにしなが、この書物の内容の一端にふれてみることにするが、膨大な全体を紹介することはできないので、最初の19巻、知多郡にかかわる部分から、面白い記事を抜き出してみたい。



知多半島一帯は古くから知多郡という郡を構成していた。『張州雑志』はこの知多郡から始まるが、西海岸の付け根の西大高村から出発し、海岸を南下して突端の師崎に及び、ここから東海岸を北上して市原村に至る、という具合に、海岸の村々を巡りながら記事を連ねる形をとっている。まずは西海岸の小倉村の記事に注目してみよう。

小倉村 大野荘

府内より行程八里十八町、船路七里十八町、

高千九百石二斗二升二合

元高八百八石八斗四升

小倉村の記事はこのように始まる。この村が大野荘という広いまとまりの中にあることが示され、そのあと府内（名古屋）からの距離（陸路と海路）と村の高が記される。地誌の体裁としては標準的といえようが、このあと村内の川と池、小倉橋という橋のことに及び、さらに「神祠」として小倉天神、「仏院」として蓮台寺と蓮生寺をあげている。

このうち蓮台寺についてはその由来を記すとともに、境内にある地藏堂と、勅使門とよばれる「不明門」（開かずの門）、衣掛松という名の古木、それから門前にある、佐治駿河守という武士の墓と伝えられる塚のことが、絵入で書かれている。これだけでもなかなかよくできた描写といえようが、とくに注意をひくのは、これに続く「土産」の記事である。

土産

青海苔（小倉苔と称す）

里民云う、当邑いにしえ塩浜あり、この所に生まる者、味わい極めて美なりし故にその名を得たり。しかるに近世数度の洪水にこの地類（くず）れ埋まりて変易す。よりて今これ無し。ただただその名のみ残れり。

この村には昔は塩浜があつて、そこでとれた海苔はたいそう美味で、「小倉苔」というブランドだった。ところが最近の洪水で塩浜が埋まってしまう、この海苔もとれなくなった。村人からの聞き取り調査をもとに、いまはなき小倉苔の存在を東甫は記録に書き留めた。洪水による海岸の変貌によって産物が変化するという、とても重要なことが、ここから窺えるわけだが、こうした記事のあとに、東甫は次のような補足を加えている。

今小倉苔と称する者は、大野辺の海中にてこれを採る。故にその味いにしえ当邑の産に及ばず。しかれども今なおその名を賞して小倉苔と号し、大野村の方物とす。

地崩れによって小倉村を追われた海苔は、海辺の大野村に移動し、大野が海苔の産地になった。昔の小倉苔に比べて味は劣っていたが、大野の人々は「小倉苔」という名前はそのままにして、これを名産品にしてしまった。生産地は移っても名前は残る。江戸時代にもブランド名は大事だったのである。



大野から南に20キロメートルほど進んだ野間の地は、江戸時代には柿並村とあったが、源義朝の終焉の地としてよく知られている。平治の乱で敗れた義朝が、鎌田兵衛正清らを従えてこの地の豪族、長田庄司忠致のもとに寄宿したものの、平家の追及を恐れた長田忠致・景致父子によって浴室で殺されたという、著名な事件の現場である。鎌倉に幕府を開いた源頼朝は、父の仇の長田父子を誅したのち、この地に大御堂寺を開き、亡父の菩提を弔った。『張州雑志』でもこの寺の記事は詳細で、遺されている縁起や頼朝の画像、義朝の最期を描いた絵巻などをことごとく筆写しており、境内にある義朝と正清の墓も図に描いている。そして長田父子が礎にされた松の木が、長田礎松という名でかつては存在していたという伝承も、東甫はていねいに書き留めているが、こうした記事のあと、産物の蟹の話に移る。

産物

長田蟹 この辺の海浜に小蟹甲に人面の如き紋あるを云う。あるいは云う。蟹譜いふところの鬼蟹・虎蟹はすなわちこれなり。

里老伝えて云う。往昔長田庄司忠致、源頼朝のため誅さる。その霊化してこの蟹となると云々。諸国にもとよりこれあり。みな土俗の事により附会するものなり。

このあたりに生息する、腹の部分が人面のように見える蟹を、当地の人々は「長田蟹」と言っていた。頼朝に殺された長田忠致の亡霊が化して生まれたものだ、という古老の話を書き留めた東甫は、つづいて関係する書物の記事を紹介しながらこの蟹に関する分析を始める。まず「本朝食鑑」という書物にみえる「嶋村蟹」の話にふれ、摂津尼崎天王寺の前の海浜にいる同種の蟹は「嶋村蟹」と呼ばれているが、戦国時代に細川高国がここで敗死したとき、その一党で強力の誉れ高かった嶋村ながしという武士が、敵二人を

脇に挟んで水中に没したことに起因していると記している。さらに「和漢三才図会」もとりあげているが、この書物には嶋村蟹や讃岐八嶋浦の平家蟹のことが記され、また賀越（福井県から石川県にかけて）の海にいる蟹が「長田蟹」と名づけられているとみえる。

各地を巡回して土地の人々からさまざまなことを聞き取り、その結果を書き連ねながら、特に動物や植物などについては、これまでとりあつめた多くの書物の記事を紹介して、それなりに学問的な分析をする、ということをおの編者はよく行っている。長田父子の亡霊が長田蟹という名の産物を生んだこと自体、興味をそそられる——長田忠致は後世まで語り継がれるかなりメジャーな人物だったのだ——が、これに留まらず、『張州雑志』のこの部分を一読すれば、江戸時代に蓄積されていた人面蟹についての知見の概略がわかるしくみになっているのである。

知多半島の海岸の生物に対する観察を重ねた東甫は、巻12の師崎村の箇所、さまざまな海の生き物をまとめて図示し、解説を加えている。長田蟹がきっかけかは定かでないが、蟹にも興味をもっていたとみえ、知多半島の各地でみかけるさまざまな蟹を図入りでコメントしている。野間の少し南、吹越村の海浜には甲羅や腹や足にみな毛が生えた、大きさ二三寸もある「カブト蟹」がいるし、吹越や半島突端の師崎村の海浜では手の長い「猿猴蟹」を見かける。師崎の先の日間賀島には蟬を倒したような格好の「蟬蟹」がいるが、当地の漁師はこれを「カッタイ蟹」と呼んでいる。海に近い山中には、土地の人が「山蟹」と呼ぶ「金銭蟹」がいる。こうした各種の蟹を、絵入で説明しているが、西海岸の付け根、横須賀村あたりの田んぼの中には、全く別種の蟹が住んでいた。東甫はこの名無しの蟹も、きちんと描いて載せている。



知多半島はまさしく漁民の世界であった。

ここを巡回しながら、海で生活する人々の生業について、東甫は貴重な記事を遺してくれた。横須賀村ではかつて領主にキスを献上し、江戸時代になると漁師たちが多数江戸に出ていたこと、東海岸の村々では塩の生産が盛んで、鉄鍋で塩を焼く村と土竈を用いる村に分かれていたことなど、注目すべき記述は数多い。文字資料をあまり残さない漁民たちの生産と生活のありようを考えるうえで、こうした記事はなによりの手がかりとなる。

ただ、知多郡の記事全体を通読する限りでは、東甫の関心の中心は人間よりも生物にあったという印象をぬぐえない。蟹の一覧の話は前述したが、それだけでなく、知多の浜にいるさまざまな貝、海で見かける魚や鳥について、絵入りで解説を加えており、これを一読するだけで、江戸時代の知多の海にどんな生物がいたか、おおよそ知ることができ

る。過去の歴史についてあれこれ詮索しているのは人間だけかもしれないが、人間以外の生き物にも、それぞれの歴史がある。今から900年あまり前、伊勢から舟で伊良湖に渡った西行は、真珠をとったあとのアコヤ貝の殻が積み上げられているさまや、「かつを」という名の魚を釣る舟が並んでいる様子を歌集の中で書きとめている。鱈は今でもこの地域の海に集まってきているし、アコヤ貝については、『張州雑志』にも「知多郡宮崎の浦」にいるとして図入りの解説が加えられている。西行はアコヤ貝の殻を「あこやとるみがひのから」と表現しているが、そもそもアコヤ貝の名は知多郡阿久比（あくい）の浜（今の半田市北部）で多くとれたことに因むとの説もある。千年のあいだに人間の生活は大きく変貌したが、海の生物たちはどうだったのか。興味は尽きないが、東甫の遺したこの地誌は、こんな好奇心にもきちんと応えてくれるのである。